

## めまいーくん

山縣浩子

「今、きみの駅まで来てるんだけど」

君はとうとうそんな電話をしてきて、私をひどく驚かせ、複雑な思いにさせた。ちょうどバイトが終わって、表へ出て、暗く重たい雲が星々を隠している空を見上げていた。そんな時だった。君がなんで突然、電車を乗り継ぎ、はるばる私に会いにやってくるのか、私には想像つかなかった。でも、全然、想像がつかない。というわけではなくて、思いつくことはどれも憂鬱な気持ちにさせるものばかりだったから、わざと思いつかないな。ってことにしたんだと思う。

「私、今バイトが終わったばかりだから、ちょっと時間かかるよ。待ってて。着いたらまた連絡する」と一方的にばばと伝えて、私は電話を切った。内心、ものすごく驚いたのだけれど、それが相手に伝わらないように、私は驚きを隠した。別に隠すこと

はなかったんだけど、なんとなく気づいたらそうしていた。今夜は雨が降るだろうな。バイトの前まではそんな予兆はなかったのに、見上げていた空は、ひどく不機嫌だった。傘がない。コンビニでビニール傘を買って行こうか迷ったけど、やっぱりやめた。君と別れた後は、雨にうたれて帰りたくなる。そんな気がしたから。

バイト場から私のアパートまでは、電車に乗って三駅。くたびれたサラリーマンと若い男や女、主婦、喋っている人、携帯をかまっている人、本を読んでいる人、眠っている人、音楽を聴いている人などなど。私はドア付近の手すりにもたれて、うつむいた。電車に乗ると、どこを見たらいいか分からなくなる。どこへ目をやっても視界には誰かが入り込む。だか

ら電車に乗ると、自然とうつむいてしまっただ。そういうえば、君も以前、同じことを言っていたっけ。この乗客はみんなどこかへ帰るのだろうか。それとも向かう途中。そこには誰かが待っていてくれるのかな。私を待っている君は、今、なにを考えているのだろうか——。なんてことを考えていたら、あつという間に、電車は私の帰るべき街、君が待つ場所へと、私を運んでいた。

改札を抜けて、私は電話をかけようと携帯をひらく、コール音を聞きながらふと目をやると、君は券売機の近くにポツンと立っていた。君が出る前に電話を切る。薬指に光る指輪を、一瞬はずそうかと迷ったけど、はめたままにしておいた。べつに、はずさなきゃいけない理由などないし、君も知っていることだから。

私が近づくの、君は気づいているようだった。けど、君はずっと目をふせて、つま先をじっと見つめていた。

「ごめん。遅くなった。——久しぶり」

「久しぶり。——ごめん、急に來たりして」

「いや、いいよ。お腹空いてる？ 何か食べる？」

「いや、別に、いいよ」

「そう——」

君との会話はいつもこんな感じだった。種を蒔いても、いつこうに咲かない。芽が出たとしても、花は咲かないんだ。そんな投げやりな会話で、でも、なんでだろう。不思議だけど、それがとても心地よくて、安心できた。これからどこに行くのか、なにをするのか、なにも決まっていな、決める気配も



© Akemi

「そりゃ、そうだけど。就職しないの？」  
「今は、まだいいよ」

「そう——」  
とぎれる会話。君は、私を待っていた時のように、またつま先を見つめている。

「大学どう？」

君はうつむいたまま、ポツリと尋ねる。

「卒論とかでき、いっぱいいっぱいだよ」

「そっかー。来年。卒業だもんな」

君は、感慨深げに何度も「そっかー」と繰り返していた。それが今日、君が初めてみせた、感情らしい感情だった。私は、今まで取って聞かなかったことを、聞くべき時だと思った。

「なんで、大学やめちゃったの？」

君は、うつむいたまま、両手をポケットにつっこむ。

「なんとなく——だよ」

「なんとなく？」

「うん。なんとなく」

「そっか。なんとなくか」

「うん——」

また、静寂がおとずれる。辺りの喧騒がガラス越しに聞こえてくる心地がした。私と君の周りを見えないガラスが囲んでいる。行きかう人がペラペラに映る。ここは別次元。

君はポケットから、ラッキーストライクのソフトをとりだし、

「あっ、ここじゃ、吸えないか」

とつぶやいて、またそれをポケットにしまった。

「ずっと、それ吸ってるんだ」

「うん。これに慣れてさ。他のは——。でも、外

じゃ吸える場所がなくなってきたから——」

「やめるの？」

「いや、やめないとと思うけど」

「なんだそれ」

二人でクスクス笑った。君が、やっと、また顔をあげた。

「私さ、めまい君——ってあだ名が嫌でやめちゃったと思ってた」

君は鼻先でクスリと笑う。

「僕、小学生ですか。そんなんでやめないよ。嫌じゃ

なかったし」

「そっか。よかった。それでやめたなら、私の責任

だし——」

「めまい君って嬉しかったよ」

「本当？」

「うん。いままでつけられたあだ名の中で、一番気に入ってる。それに、君がめまい君っていうと、な

んか、あったかかったんだよ」

「あったかかった？」

「うん。なんていうかな。心がさ、あったかくなっ

たんだよ」

とあって、君はまたうつむく。それはきつと恥ずかしかったからだと思った。こんなこと、言えるよう

ないから、二人並んで券売機の近くに立っていた。行きかう人々、乗車券を買う人、喧噪の中、私たちの周りだけが、ひっそりと静寂につつまれる。君の息づかいが聞こえた気がした。

「まだ、バイトしてるの？」

「うん。働かなきゃ、食ってけないし」

な奴じゃないから。

「君の住む街、人、多いな」

「ははっ。また倒れそう？」

「ばか。もう倒れないよ」

大学に入学してまもない頃だった。共通科目の講義。マンモス私大の一回生がわんさか集まる。講義室は人、人、人で溢れかえっていた。講義室に入ったとたん、君はその人の群れに卒倒してしまった。そして、その後ろには、偶然私がいた。それが私と君との出会いだった。しばらくして、私はいくつもある軽音楽サークルの中でも、一番規模の小さいところへ入った。そこであの日倒れた君と再会した。私は君を「めまい君」と呼び、君は私を今でも「君」と呼ぶ。

私は君が好きだった。たぶん、おもいがかりとかではなく、君も私を好きだった。でも、お互いに別々の人と付き合ったり別れたり、恋愛を繰り返して、結局、君と私は友達のままだった。私はよく酒瓶を抱えて君の部屋に遊びに行き、飲み込んだ。君の部屋にはレコードがたくさんあって、それをずっとかけながら、なにを話すでもなく、飲みに飲んだっけ。君は知っているだろうか、君が大学をやめた後、私は軽音楽サークルをやめた。そして、サボり気味だった講義もますます出なくなっていた。だから今、いっぱいいっぱいなんだよ。

「指輪、きれいだね」

「ありがとう」

「本当に、結婚するんだね」

「うん。卒業したら、すぐ」

「いいな。働かなくて」

君は冗談まじりに嫌味をいう。少し、悲しそうだった。

「僕、いけないよ。結婚式」

「うん、いいよ」

「おめでどう」

「ありがとう」

心が強くゆれる。めまい君、めまい君。私はあなたを……。涙が曲線を描いて、地に落ちた。ポツリ、ポツリと、今まで堪えてきたかのように、雨も地を濡らし始める。

「なんで、泣く」

君は困ったような、嬉しいような、切ないような表情で、私をみつめていた。

「そろそろ、帰らないとな。僕、明日、朝からバイトなんだ」

そう言っ、君は腕時計をみる。そして、まだ泣いている私を見て、また時計へと目を落とした。私はそんな君を強く抱きしめた。君は突然のことに驚いて、躊躇していたけど、ぎゅっと強く抱きしめ返してきた。じつとりとした湿気のニオイと汗のニオイがする。それは、くさくて、くさくて、そうして、とても愛おしかった。君の息づかいが、今、はっきり聞こえる。

言葉もなくしばらく抱き合っ、それから、そっと離れた。お互いに、つま先をみつめる。

「じゃあ、僕、帰るね。幸せに。来てくれてありがとう」

「とう」

君が改札の奥へと消えてゆく。ばいばい。ありがとう。ばいばい。ごめんね。ポツリ、ポツリと降り出した雨は、今はどしゃ降りになっていた。こんな夜を越えて、私も君も、また同じ朝を迎える。私は大学にバイトにと相変わらず来てこまいで、君はせつせとバイトをしてお金を稼ごう。そういうえ、君は大学をやめてアパートをかえたけど、前の部屋にあったレコードの山は、新しい部屋に今もあるだろうか。もう、二度とあがることのない君の部屋が、脳裏でまぶしい。あの頃がよかつたなんてセリフは、まだ若い私には早すぎるかな。

カップルが同じ傘の中、肩を並べて夜の街へと消えてゆく。私も帰ろう。券売機を振り返ってみる、君はいない。改札へと目をやる、やっぱり君は、もういない。駅中には変わらず喧騒が広がっている。路上へでると、数分も経たないうちに、全身水びたしになった。やっぱり、傘を買わなくて正解だった。この雨が、すべて流して、そして優しく包んでくれる。さあ、帰ろう。そこには、私の帰りを待つ人がいる。めまい君にも、帰りを待っていてくれる人がいればいいなあ。と、そう思った。

〈完〉

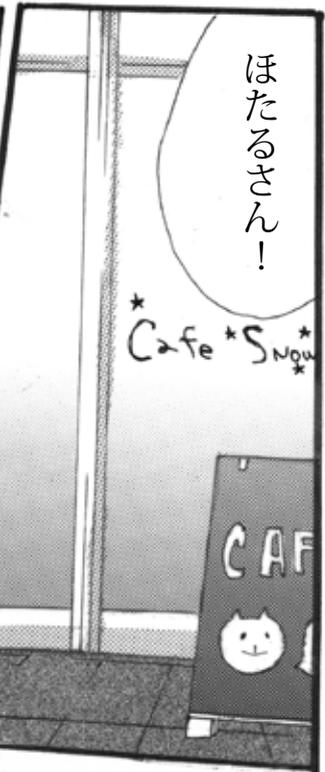
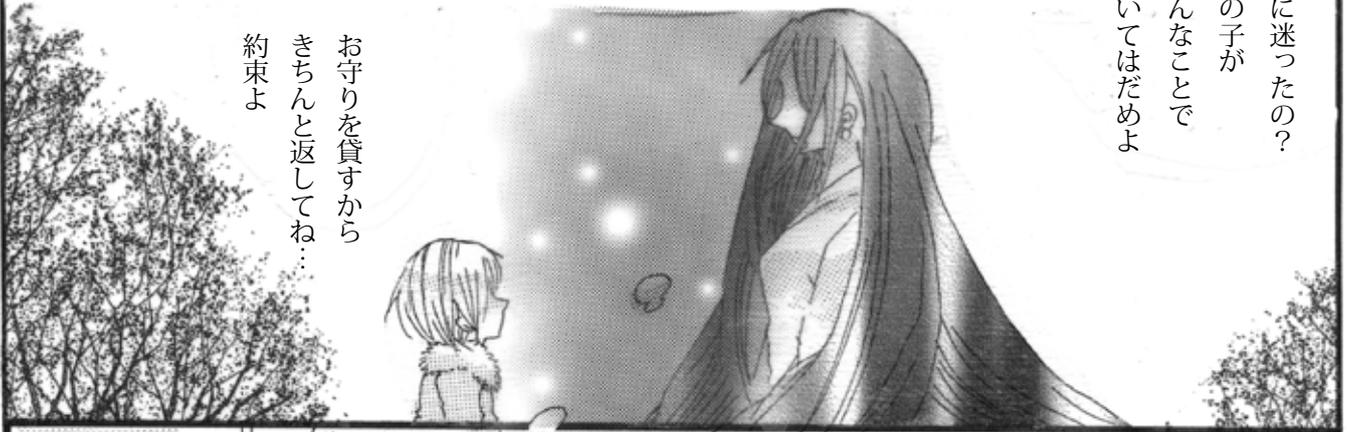
(やまがた・ひろこ／日本語文化系一年生)

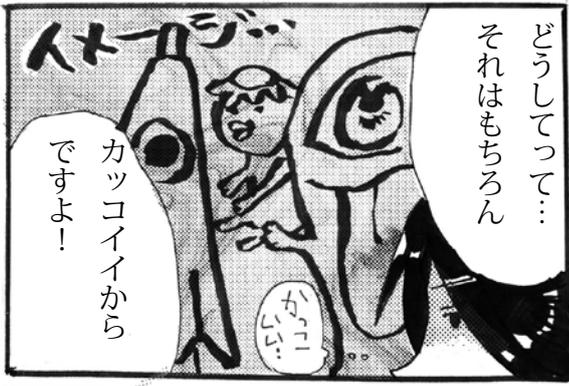
# 秘密

古志 杏

道に迷ったの？  
男の子が  
そんなことで  
泣いてはだめよ

お守りを貸すから  
きちんと返してね…  
約束よ





どうしてって...  
それはもちろん

かっこいい!  
カッコイイから  
ですよ!



ねえ

どうしてかなめくんは  
妖怪がすぎなの?



でも

のめりこんだ  
きっかけはやっぱり  
アレかなあ:

アレ?



俺

雪女に助けられた  
ことがあるんです!



宝石?

これを見て  
ください!

本当ですよ!  
証拠もあるんです!



…で、そのとき  
助けてくれたのが…

雪女  
だったんです！



俺は小さいころ  
雪の多い県に  
住んでいました

いつものように雪山で  
妖怪探索をしていたら

急に吹雪いてきて  
道に迷ってしまった  
んです…



それで…泣いて  
いた俺に

雪女がピアスを  
片方くれたんです  
「お守りだ」って

じゃあ  
もう片方は雪女が  
持ってるのね…



道を  
教えてくれて…

あっちよ



意外だわ

雪女って  
なんか悪い妖怪の  
イメージ…

そうでしょ!?

ばんっ

でも  
優しいんです！



でも

この前その雪山に  
行ってみたらスキー場  
なってたんです…

まあ

それじゃあ…

もういない  
かも…です…



岩手県や宮城県では  
人の精気を吸うとか  
言われてるし…

イメージ

でも俺を  
助けてくれたのも  
事実で…

でも 俺が忘れなければ…  
思っていれば また必ず  
逢えるって信じてます

ピアス返さないといけないし  
お礼も言いたいですし…

かなめくん…

あー！  
もうこんな時間！

変な話聞かせちゃって  
ごめんなさい！  
また来ますね！

ばん、

……

大きく  
なったわ…

この前まで  
道に迷って  
泣いてた子が…

ピアス返さ  
ないといけない  
し お礼も…

かなめくん…

じゃあ  
待ってるわね

# 回顧談

伊藤善啓

## 昭和との再会

映画「ALWAYS 三丁目の夕日」  
全二巻を見た。涙した。フラフラ！

あった、あった。抱っこちゃん人形！  
あった、あった。設定年代は昭和三十三年だそうだから、登場する子供達は小生と同じ年頃となる。日本が戦争に負けてまもなくして生まれた世代である。あの頃を過ごしていた小生自身と映画の子供達とが重なる。重なるから懐かしさに目頭が熱くなる。

でも、ちょっと待てよ。小生の頭の片隅が異論を唱えている。「何かが違う」と。この映画の舞台は東京という大都会の片隅であり、小生がガキの時代を過ごした松江及びその近隣にある町・村とは事情がだいぶ違う。それにしても、当時の町の様子はもつと汚かった。もつと生活臭があったのだ。

長髪じゃなくて坊主頭をしたガキが大半だった。ズック（スニーカーをこう呼んだ）が普及するまで、履物は下駄だった。薄い薄い生ゴム製の短靴だった。田んぼの中で遊ぶと水が入り、グチュグチュという音がし、何とも気持ち悪かった。靴を脱ぐと指の間が黒くなり臭かった。

ズボンには当て布がしてあり、学生服の袖口には変な艶があった。「青ばな」を袖口でぬぐった跡だから、のり付けした衣類のようにびーんとしていた。どうした訳か、青ばな垂らしの男の子達が少なからず居たものである。

この映画を知る前のこと、「昭和の子供たち」というジオラマ風人形展を米子市内の某デパートで見る機会を得た。会場に入ると、あるわ、あるわ。ジオラマとは言え、正に小生の年代が送った頃が再現されているではないか。

薄汚れたランニングシャツを着、坊主頭の子連中がメンコ（こつちではペタンと呼んだ）に興ずる姿は、胸に迫るものがあった。彼らの表情が良かった。女の子達は例によって、ままごと遊び。母親が我が子に母乳を含ませる姿は神々しくもあった。空き地で、水飴を舐めながら、紙芝居を食い入るように見つめているガキ達の表情。

そうだった。このとおりだった。その場に居合わせていた初老の婦人など、目に涙を浮かべていた。よっぽど、懐かしさに心打たれたのだろう。そのぐらゐ、団塊の世代の心を揺さぶる光景が目前に展開していた。

……と、戦後（もう、死語だ）の昭和をガキとして過ごしてきた小生が、ふつとその頃を顧みる機会を得たのである。

## 熱血先生

「あの頃は良かった」と言うようになると、それは年を取った証拠だそう。断っておくが、小生は昔の方が良かったなんて、短絡的に結論付ける意図は毛頭ない。ただ、今の時代、我々は、日本人が長い間培ってきた美德を喪失してしまっただけではない。

我々は「恥を知る文化」を誇ってきたと思っている。「こんなことしたら恥だ」とする自制心が働いていたのではないのか。何より

も、人に共感できる感性を身につけていたのではないのか。それが今では、冷めた人間だらけの社会となってしまった。小生の目には、デジタル化された無機質な利己的人間集団が益々形成されているように映るのである。

「熱血先生」という語がしきりに使われていた時があった。熱血先生。生徒を何とかして良い方向へ導いてやろうとする正義感溢れる先生を指す。捨て身の、燃えている先生である。

小生の高校生・大学生時代頃であったろうか、学園青春番組がしきりにテレビ放映されていたものだ。今から思えば、そのクサイ物語は、大体次のようなものであった。一人の青年教師がある高校へ



© Akemi

転勤してきた。担当科目は英語。ラグビー部のコーチとして汗を流す毎日が続くが、部員生徒達と対立する。が、徐々に生徒達の間で、人望が出てくる。やがて、その先生が次の赴任地へ転勤する時が訪れる。小さな駅舎へ部員連中が見送りに来ている。線路を挟んで、向こう側に先生。こちらに生徒達。

そして、である。ラグビーボールがパスされ始めるのだ。線路を挟んでのパス。「俺たちは先生が好きだ」と先生へ叫ぶ。「俺もだ」と先生。おーい、誰か止めてくれよ。電車が入ってきたらヤバイ。それから、最後まで反抗的であつた生徒が、「先生、俺をなぐってくれ。俺が悪かつた」。先生は思いっきり殴る。



© Akemi

そして言う。「見ろ、夕日が赤いぜー」クッサー！クサイがこれが小生の抱く先生像であつた。全くのアナログ人間である小生は、浪花節が語る義理と人情の世界を美学としているのだから。

### アナログ的學生時代

小生が大学生の時、代返（授業に欠席した友達の代わりに返事をしてやること）は、ある意味友情の証であつた。面白いことに、女子学生から代返を頼まれた男子学生が、本当に代返をしてやつたのである。周りの連中は笑い転げた。何しろ、男が、黄色い声出して女の子の為に「はーい」って返事してやつたのだから。

この時の授業担当教授がまたエライ。全てをお見通しだつたけど、何も言わないでその女学生を出席扱いにしたみたいである。現在、携帯電話によって出欠が厳しく管理される大学もあるという。こんな粋な計らいができないものかねえ。

まだある。これも小生が体験した実話。大学近くの飲み屋で友人数人と一杯やつていた。そこにたまたま居合わせた着流しの和服姿の老人が「君たち〇〇大学の学生さんかい？」って聞いたので、「そうですか……」と言うと、「少ないけど、これで飲んでくんないけど、言った訳。何と、当時のお金で

一万円をくれたのであつた。いなせだねー。

ところで、同じく学生時代に、小生は友達とヘンテコな賭をしてしまった。下着を替えないで、風呂に入らないで、何日間我慢できるのかというのである。それも、六月上旬の話だつたと思う。結局、小生が勝つた。実に二十三日間という苦難の日々を乗り越えたのであつた。

汗という汗は重油をかぶつたような感触。股間は痒くなる。身体は自分でも気付くぐらい臭くなる。特に、電車に座つた時に風が立つ瞬間。さぞ、周りの乗客は迷惑であつただろう。ひげは剃らないから、マスクをして歩いていたら、その後、下着を洗おうとしたが、キャベツのように水をはじくので捨ててしまった。今思えば、「猛者」という言葉に青春を託したかつたのかもしれない。

### 自然へ帰れ

話を小学生時代（つまり、ガキ時代）へ戻そう。当時は学校給食はあつた。ただ、その中身がどのような物であつたのか、今のお坊ちゃま達にはわからないであろう。臭い「脱脂粉乳」（牛乳ではなく）を息を止めて一気に飲んだものだ。たまたまにコーヒー牛乳と称したこげ茶色の飲み物が出たが、それが楽しみだつた。ほんま物の牛乳は、風邪を引いて熱が出た時以外、普段飲ませてもらえないような代物ではなかつた。

学校から帰ると近所のガキ連中と遊ん

だが、大体どこにもガキ大将が居て、グループをまとめていた。悪いこともいいことも連中に教えたものだつた。とつくみあいのケンカしても、これ以上ダメージを与えるとやばいと思うと、それでケンカは終わった。今のように相手が死に至るまで徹底した攻撃はしなかつたのである。

野原や荒地がゴロゴロしていた頃だから、その上で相撲を取ったり、ペツタンをしたりする姿はどこにでも見られた。特に、田んぼや畑は面白かつた。で、これらの片隅には、大体必ずと言っていいほど「野壺」というヤツが、地表ギリギリまで埋め込まれていた。

これは肥料にする人糞を入れて保管し熟成させる壺である。蓋はない。新しい人糞は「強力」すぎるので、枯れるのを待たつたそう。その野壺には屋根が付いているのもあつた。屋根と言つても、わらの束が斜めに立てかけてある程度だつたが、それが偉大な力量を発揮することとなる。

積雪量が結構あつた当時の冬、雪に田畑がすっぽり埋まつてしまうと、野壺も何も識別できなかつた。が、屋根のお陰で、難を逃れることができるのである。足をすぼつとはめるといふアクシデントが激減する訳だ。

冬になると、露天風呂のように湯気が上るのが観察される。また、夏には、それが枯れ果てて、表面がぱりぱりになる。下の汚物が上へ浮かび、そのぱりぱりと

一体を成す。そう、それはもうピザのトッピングの世界である。多分、子猫がその上を歩いても沈まないかもしれない。

農薬の害が叫ばれて久しい現在、この窒素循環という極めて自然の理にかなった農法こそが健康に良いと思われる。ちなみに、畑の白菜という白菜には黄色くなった新聞紙の切れ端がべたべたくっついていたのである。くみ取り式トイレで尻を拭いた新聞紙達が究極的にたどり着いた居場所である。

このように書くと、小生は糞尿譚を楽しんでいるようであるが、とんでもない。小生が言いたいことは、自然へ帰れということである。現に、今を騒がせている花粉症なるものも、腹の虫、つまり、回虫等が腹から居なくなったことと関連するという説が浮上している。人糞を肥料としていた時には必ずと言っていいほど虫が腹に湧いたものであった。そして、定期的にサントニンという虫下しを飲んだものである。その代わり、当時、花粉症なんて言葉は聞いたこともなかった。

## 遊びの中に

今のようにテレビ漬け、ゲーム漬け、コンピューター漬け、塾漬けでなかった時代、ガキ共の遊び場と言えば、大体外であった。小生などはチャンバラごっこが大好きで、かっこのいい竹や木の棒を道端に見つけると、宝物のようにして隠しておいたものである。陣取り合戦と言う、地面に釘をたてて陣地を獲得する

ゲームもした。また、大人用の自転車をこぐのに、「三角こぎ」というハイテク技術を使った。サドルに座ることができないほど未だ背が高くなかったので、三角形フレームをくぐらせて、片足を向こう側のペダルに乗せる技術である。

女の子はままごと。お手玉。当時、精巧なおもちゃがあったわけではないので、何でも「……のつもり」で遊びをした。一枚の葉っぱがお金になったり、皿になったりした。何にでも見立てたられたのである。それは、子供達の想像力をかき立てた。その想像力は更に創造力を培った。超精巧なおもちゃは、与えられた役割しか演ずることができない。超単



© Akemi

純な遊び道具には、その場その場でいろいろな役割を持たせることができる。

一方、現実と仮想とを混同させるリアルなテレビゲームでは、死んだ敵が何度でも生き返ってくる。無機質なサイバースペースの世界だ。このような世界に継続して身を置けば、誰の脳でもおかしくなるさ。その挙げ句の果てが「誰でもよかつたけど、殺したかった」に行き着くのも不思議は無い。

## どうなってんの、今？

ビジネス界の経営手法が教育の現場にも持ち込まれ、一分の隙もない理論とコンピュータプログラムによって学生・生徒達が「管理」・「指導」され、彼らの能力が極めてクールに「開発」されていく現在、小生は「俺のようなアナログ教師の時代は終わつた」とつくづく思うのである。

他人の子供でも、親の帰りが遅い時には、我が子と一緒に夕食をさせた人情話ももう聞けないのか。その逆に、見ず知らずの子供が線路で遊んでいるのを見て、危ないから止めなさいと注意すれば、その子の親から「余計なことをしないで！」とどやされる時代。そうかと思うと、我が子を虐待死させる親。一体、今何が起きているのか。ほ乳瓶で我が子に授乳する若い母親

は、片手で携帯電話のメールに夢中。もう一方の手は瓶を支えているだけ。母子のコミュニケーションが生まれるはずもない。

ところで、非を周りに求め、自分を省みない人間の数が増加したように思うのは小生だけであろうか。最近目に触れた記事で次のようなのがあった。同級生へ暴力をふるったので、担任から叱られた中学生を持つ父親が、「何で自分の子ばかり叱るのだ」と食ってかかったというのである。

また、こんなことも耳にした。高級住宅地にある小学校の保護者参観授業の日、母親連中を前にして、子供達に授業をしていた先生が間違つたことを教えてしまった。その時、すかさず、後ろに並んでいた母親の一人が「先生、それは違うでしょ。それは、こうですよ」と訂正した。子供達の眼前に於いてである。その若い女先生は空しさを覚え、結局教員を辞めてしまったそう。わかるな。

それにしても、心の貧しい人間が何と多くなつたことだろう。物質的に豊かになつたのが原因なのかどうかは知らない。もしそうであれば、駄菓子屋であれこれと物色した挙句、ソース煎餅を仲良く分け合つて食べたあの頃が懐かしい。やっぱ、小生は年を取つたということになるのか。

(いとう・よしひろ／英語学)